

「皇甫誕碑」



「房彦謙碑」



皇こう  
甫ほ  
誕たん  
碑ひ

630年代頃  
(初唐・貞観年間)

古典碑帖の窓⑤

木 雞

木 雞 室

伊藤 滋

初唐の三大家の一人・欧陽詢の楷書は、最も構築性に富み、完成の極に達していると評されている。特に「皇甫誕碑」は非常に鋭利な趣を示している。この背景にあるのは、比較図版に示した、欧陽詢の「房彦謙碑」(631年、貞観5年)である。欧書について、この碑に言及する人はそれほど多くない。私は、欧陽詢の楷書の基盤は房彦謙碑にあると考えている。五、六世紀は、楷書が主流の時代である。房彦謙碑は楷書と隸書の混在した書風であり、同時代の書と比較してみると漢時代に栄えた隸書を取り入れた古い様式を示している。皇甫誕碑や九成宮醴泉銘は非常に進化した新しい様式である。ところが欧陽詢はこれらの三碑ともほぼ同時期、七十歳頃に書いている。晩年にあっても同時に新旧両用の書法を善くしたのである。房彦謙碑の楷書と隸書の混在した書風は、やや不安定なところがあるが、横画の力強い筆勢は隸書の波勢を具えている。皇甫誕碑のもつ鋭利な力強い横画の筆勢は、房彦謙碑の横画そのままである。いつの時代でも古い伝統は伝えられてきたのである。欧陽詢の房彦謙碑的な書法は、子の欧陽通に伝えられ、「道因法師碑」(663年)の隸書の波勢をとまなつた強い横画は、房彦謙碑の筆法そのままである。

道因法師碑 (選字)



「皇甫誕碑」 (選字)

「房彦謙碑」 (選字)



# 書道芸術院 平成の書 (2009)



砂本杏花

財団法人書道芸術院  
理事

第62回書道芸術院展出品

砂本杏花書

「矛盾だらけの中で」

「書をつくる」という大きなテーマに対し私はいつも感じています。「何と大それた事をくり返しているのかしら?」「自身の生き方は、これで納得?」頭の中は制作に向かつてはむしろ拒絶モード。矛盾した時間の中で益々それを実感しつつ、フッと台所を掃除してみたり、ギリギリの時間なお茶をのんでみたり、CDをききつつ、何もかもリセットして重い肩の負担を柔らかくしよう...とします。(書かねばという気持ちからの解放)

でも不思議なことに脳の隅っこで構成を考えている自分に気づきます。「淡墨は、あの色で、深いにじみを追う...。そして筆は荒々しくつよく?。そして又ほそく?。」と色々思いめぐらした揚句、気づけば画仙紙に向かい書いています。そんな試行錯誤をくり返し、紙を使い「苦しい!」と思いつつもやめられません。一点やっ自分分を吐露した作品が出来たかなという一枚を壁面にはり、ためつすがめつ眺め、またこりもせず「書く」というくり返します。

このところの私は、作品は俳句を書いています。五・七・五を紙に置き苦しんだ上で、文字の置き方を少し変えてみるだけで、我に返りトンネルからぬけ作品が出来ることが多いようです。

常識的に、よみやすいように、文字を置くのが最良と思っていますが、私の中の「ムシ」がちよっとうごめきはじめ、書作に対しての訳のわからない楽しい時間がや々とスタートしてゆきます。

ところで漢字に「かな」を調和させる現代詩文書の制作では「かな」をおざなりにには出来ません。「かな」の造型にはオーラがあると思っています。文字巾を拡げて漢字と対比させたり、小さくしぼって筆圧を加えると大いに力を発揮してくれるので、書いているうちにワクワクして来ます。

さて写真の作品は「鷺」という姿の美しい鳥と、「白」を強調した長谷川権氏の俳句に魅きつけられました次第です。

積文「薫風や鷺白き花さながらに」

# 書のひろば

理事長 恩地春洋

## 毎日61回展始動 —新しい時代の夜明け—

先日「毎日書道60周年の歩み」が届いた。ほぼ完全に記録としてまとまっている。貴重な資料となるだろう。

第61回展は、7月8日から8月2日まで東京展を始め、関西展とつづき、12月6日の九州展で終わる。

「松丸東魚の全貌展」を東京展の陳列部長の大役を辻元大雲理事が務めた。尚、北陸展実行委員長に浜谷芳仙総務を始め、全国の院の同志の方々の活躍が始まる。

7月12日、表彰式に先だって辻元大雲、薄田東仙さんの毎日書道顕彰式があり、会員賞には工藤永翠さんを始め毎日賞、秀作賞、佳作賞と二時間わたった。



(下谷洋子)

この記念事業の期間は(2010年1月1日から12月31日)と定めています。毎日書道会は、昨年北京大展開で、「国際書法交流大展」の奈良大展

た。その後、院主催の祝賀懇親会には、二〇〇余名の参加で、共に健闘を称えあった。

(詳細については、特集記事を参照) ほぼ同時期に、院関係の書展が東京で氣勢をあげた。

○夏の春洋会書展(会長恩地春洋)

○玉松会13人書展(会長石井明子)

○龍龍会書展(23回毎日訪中団員参加前田龍雲)

○燦華展(下谷洋子、千葉蒼玄、松吉久美子)

○みちのくの書人たち(会長坂本素雪)

### 平城遷都1300年祭と 国際書法奈良大展

山陽道は、太宰府から博多、山口から瀬戸内を通り、京都から奈良が終点と聞く。

奈良に平城京が誕生して平成22年(2010)が1300年に当たり、奈良県は「東アジア未来会議奈良2010」として諸外国との交流促進、奈良の歴史文化

観光拠点としての発展を目ざしています。

この記念事業の期間は(2010年1月1日から12月31日)と定めています。毎日書道会は、昨年北京大展開で、「国際書法交流大展」の奈良大展

の開催が決定しました。

・期日 10月14日(木)〜19日(火)

・会場 奈良県文化会館

・実行委員長 恩地春洋

副委員長

石飛博光 貞政少登 大築華雪

辻元大雲 船本芳雲 神郡愛竹

相談役 小伏竹村ほか関西の9氏

総務部長 北野攝山 副 藤野北辰

陳列部長 三浦白鷗 〃 柳谷金平

図録部長 作田英嗣 〃 (座本大江)

広報部長 池田若邨 〃 (西野玉龍)

式典部長 吉田青雲 〃 向井三聖

講演会部長 相原雨雪 〃 岡本正志

渉外部長 砂本杏花 〃 (小伏小扇)

・主任(略) 地元関西展役員に委嘱した。

### ◇出品の国と地域

中国、香港、韓国、マレーシア、シンガポール、台湾、フィリピン、カナダ、フランス、インドネシア、マカオ、日本、その他

出品数や来日中の行事その他は、総務部長を中心に起案し、実行委員会が決定する。

### 前大使林景一さんの アイルランドの本

日本の現状を心配して、誰もが憂国の志士となる国民の一人として、もう一つ心配したのは、林景一さんのことだった。

その林さんから六月の中頃だったか?

突然一冊の新書版の本が届いた。「アイルランドを知られば日本がわかる」(Oneテーマ21)だった。

麻生内閣の官房副長官補となって外務省から出向した林景一さんは、院の60周年記念海外展のアイルランド展で大へんお世話になった人である。

素人ながら、外交関係なら、総理の外交の手助けや準備で国の中枢を担う大へんな仕事だろうと想像はついた。

時には「首相日程」欄に名前を見つけたアイルランドの本が何を意味するものかと考えたりした。

ともあれ、「アイルランドを知られば日本がわかる」を読み始めた。「風と共に去りぬ」の話から、話に引き込まれて、次から次へと映画の話、スポーツの話などがつづく、その間に、イギリスとの関係、アメリカとの関係が平明に語られていく。林さんのアイルランドに対する愛情の深さに心奪われた。

文芸春秋画廊で私たち社中展でこの本を紹介させて頂いた。最後まで読み切っていないが外交の基本は国と国の信頼関係であると説き、英愛関係から日韓関係のなすべきことが見えてくるという。

日本と同様の資源小国であり、独立戦争で自由を勝ちとったアイルランドは、弱小国を支持し、スポーツでも弱い方に応援するという。外交官としての冷静な目と暖かさの印象に残る一冊、一読をお勧めする。

## 漢字 (五)

小浜 大明

現在、書道展が数多く開催されていますが、長文の書を見る人の多くは、作者が伝えたかった感情や想いを知ろうとするよりも、詩文の内容や意味を知りたがる人が多いと感じています。書を深く味わうには書に関する高い見識が必要になる為、この書のどこが良いのがわからないとも言います。その点、一字なら意味も理解でき、構成の妙も感じ取ることができるものと思います。何もわからない海外の人にも感動を与えます。



15×10cm

「己午」

小浜大明書

文字を選ぶとき、意味からと、形からいく場合とがあるかと思いますが、文字の意味と造形性の合致したものが最善とされます。が、その様な表現は出来難いものです。多くは造形美が中心になります。そうなると同一の文字を選べば類型が多くなります。その時必要になるのが、篆書や隸書、木簡といった書体の知識です。また、前回述べた古法等を駆使した独自の用筆が必要になるでしょう。

写真の作品は、古法の中の俯仰法や懸針の筆づかい、顔真卿の書に見られる直筆と側筆を象体に応用し、明るさと力強さを念頭に書してみました。

## 21世紀の書

### —私の主張—

## かな (五)

前田 まさ美

書道芸術誌に特別研究部が出来て、早くも五年になります。初めは出品を躊躇していました。が、選ばれた作品が先生方のご批評をいただける事を知り、私も出品させていただいています。

毎月題材を決めるのに、苦勞します。新聞に載っている「季節のたより」から字数の少ない俳句を中心に、また、公募展では書けない、片カナ混りの句を選ぶこともあります。用紙のサイズも半折から毎日展サイズと大きくなったので力が入ります。出品して一年程経った頃、運よく特選になりましたが、うれしくもあり、恥ずかしくもあり…



180×60cm

前田まさ美書

でもとても励みになりました。指摘された事柄を頭に入れ、次の作品創りをします。「線の深さ」「潤筆の扱い」「筆の回転」「線の切れ味」「冴えた線」「紙、墨の相性」「墨色」「余白」……

研究する事が沢山ありすぎて、整理がつかない状態です。今まで夢中で書くことだけで精一杯だったのが、少しは考えて作品づくりをするようになりました。

友達と休まず出品しましよと、約束して、これが破られることなく今日信じてこれからも作品を出品していくつもりです。

左記の作品は、金子兜太の「どれも口美し晩夏のジャズ一団」散らしの變形で余白、流れを試みましたが、片カナをいかにかなに合わせ表現するか、巧く適えば、新装の作品になるのですが、まだまだです。

# よき師にめぐり逢えて

高 埜 美 仙

(漢字部・審査会員)

待ちに待っていた第60回書道芸術院  
展記念集が届きました。中には記念集  
の他に院展作品集(DVD)が入って  
おり、時代の流れを感じると共に、編  
集に携わった諸先生方、スタッフの皆  
様に深く感謝申し上げます。

年が明け元旦の朝、私は家族の祝福  
の言葉を受けて、無事喜寿の誕生日を  
迎えました。我が家では、毎年正月、  
床の間に決まった掛け軸を掲げます。  
書軸で、文字は「鶴寿」今は亡き恩  
師古橋飛山先生(92才書)よりいただ  
き、私にとってはとても大切な書軸で  
す。

この書を見ると、教室での先生の姿  
や、様々な想い出が甦ってきます。

新制高校卒業後(昭24)教師になっ  
た私は、結婚・三人の子の母親に、で  
も家族姑の協力で継続できました。

教職について20年が過ぎた勤務校で  
「書を習って展覧会に参加したら。」

その声は、教頭の畠田先生(畠田王  
有・漢字部審査会員)でした。続いて



若き日の古橋飛山先生と高埜美仙

先生は、よき指導者として古橋飛山先  
生を紹介してくださいました。  
よき師(古橋飛山・書道芸術院顧問)  
と私と書。出会いとその結びつきは、  
畠田先生の書への誘いを機に、私は飛  
山先生に出会い、教えを受けて、書を  
学ぶ道を一步一步歩き始めました。



古橋飛山先生の書  
(92歳)

当時(昭46)先生の教室は、旭駅前  
にあり、始めての学習は、漢字の楷書  
からでした。先生の熱心な指導を受け  
ご褒美、美仙の雅号と雅印をいただき  
翌年の2月、芸術院展第25回展に見事  
入選。初出品、初入選で芸術院とのつ  
ながりは、この25回展より続きました。  
その後教室は、干漏へと移り、自転  
車で45分もかかる道を遠く感じました。  
仕事と家庭に協力してくれた姑が、  
病の床に。幸い義姉や親族のおかげで  
教師も書も続ける事ができました。

ベッドの上から「行っておいで。」姑  
の声を背に、みだれ咲く野ばら眺め  
つペタル踏む足軽やかに師の家近し。  
先生の笑顔に迎えられ、懇切丁寧な  
指導と、私へのほめ言葉(努力と継続  
励まし)に支えられ、私はペタルを踏  
んで教室へ。先生と私を結ぶこの道は、  
多くの人の協力で、長く続きました。

時代も昭和から平成へと変わり、私  
の教室通いも自転車から車へと変わる  
時が友人Sさんと出会い、私はSさ  
んの車で、月に一度の筆硯会に参加し、  
魅力ある先生の指導を受けました。  
書と音楽は(リズム・強弱・バラ

ス)相通ずると、筆を持ち、墨を散ら  
し、見事な表現力で書を書く先生の姿  
に、皆は感動の拍手をおくりました。  
平成16年10月、先生は、私達の願  
いも叶わず、天国へと旅立たれました。

享年96才「生涯現役」誰よりも書を  
愛し、書に情熱をそそぎ、書を全うし  
た先生でした。書を通して先生は、私  
にたくさんの想い出や贈りものをくだ  
さいました。古典臨書、月例の数々  
のお手本や詩集孕路、手紙や院賞授賞も。

先生亡き後は、Sさんと二人で個々  
に練習を続けました。平成17年、私達  
にチャンスが、親子ほども年が違う若  
い増田先生(増田秀峰・漢字部審査会  
員)に指導を受けることになりました。  
飛山先生と同様で、生徒の個性を生  
かし、ユーモアを交えながら、丁寧に  
指導し、筆を変え、書風を変えて、お  
手本を書いてくださる先生に、私は、  
感動と感謝の気持で一ぱいです。

「よき師にめぐり逢えて」これからも  
飛山先生の笑顔とはめ言葉を胸に、増  
田先生の若さと情熱をいただき、書  
道をゆっくりと歩んで行きたいと思  
います。

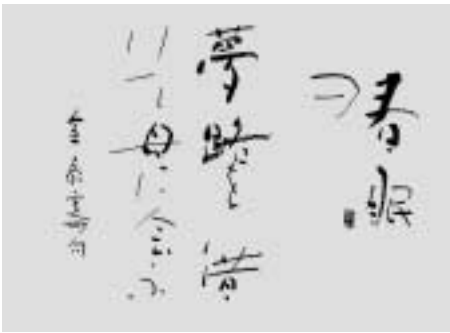


横井正江  
(大阪)



「寿」

あわてず、急がず、怠らず、急いで走れば見えるものもみえなくなる。ゆっくり歩けば小さな草木も踏まずにすむ。そんな気持ちで20数筆を持ってきました。  
ご指導くださった恩地先生そしてすばらしい仲間感謝し、変わらずゆっくり歩み続けたいと思います。(正江)



浅利祥紫  
(青森)

「春眠の夢路を借りて母に会ふ」  
亡き母のやさしさ、暖かさをイメージし、余白の取り方を意識して表現してみました。必要にせまられ始めた「書」ですが、素晴らしい師や仲間に出会えたこと、また今では生きる大きな支えになっていることに感謝しております。  
(祥紫)



庄司紅邨  
(福島)



「滝の上に水現れて落ちにけり」

後藤夜半

勢いよく流れ落ちる水、この句のように清新で、みずみずしい作品をと思指してきましたが、やっとスタートラインについたばかりです。私の師、加藤紅樹先生に導かれて30年。世界に誇れる「かな書道」の美、奥深さを探求していきたくと思っております。  
(紅邨)



佐々木浩子  
(富山)



「呼吸」

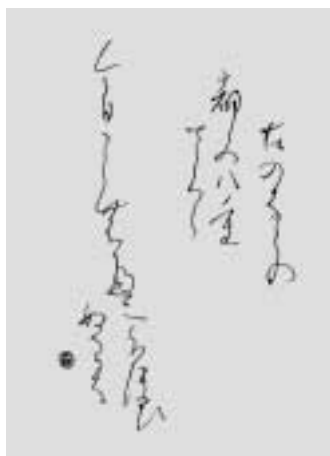
紙と墨とのマッチェールだけに注意して基本に忠実に書きました。半紙大の作品でも、あえて、課題がたくさん見えてきました。初心にもどり、また、書作に臨んでまいります。  
(浩子)



川口美智江  
(埼玉)

「いにしへの奈良の都の八重  
桜けふ九重に匂ひぬるかな」

伊勢大輔 詞花和歌集



仮名の優麗な奥深さに魅力を感じ、下谷先生の門下でお勉強を続けて居ります。周辺には書に関係する達人が多く、競争心も上達する要素と考え、大切な事と受けとめ、また仮名の動きの大胆さに驚きを感じ乍ら精進しています。よき師にめぐり逢えて感謝しております。  
(美智江)



鈴木蕙月  
(東京)



「波」

この度審査会員に昇格する事が出来、身の引き締まる思いです。この重い肩書に戸惑いもありますが、香川倫子先生のお顔に泥を塗らないよう一層の努力を重ねる所存でございますのでよろしくご支援くださいますようお願い申し上げます。  
(蕙月)



野登蒼山  
(青森)



「心擬形釋」  
印は、印稿が五割、刻法五割でできるが押印の技術で篆刻美の表現を左右する。と師の言葉である。教えを受けて十数年それなりの向上はあると思うがまだまだ勉強途上である。更に精進を重ね、諸先生に少しでも近づきたいとの念願はある。言えることは、たゆみなく努力を続けることだけだ。  
(蒼山)



伊藤翠心  
(宮城)



「初恋」

島崎藤村詩

清冽なみずみずしい情感に心打たれ藤村のリリックな世界に幾度浸ったことか。詩文から零れる美しい言葉と視覚に感じる文字群の魅力と筆で表現出来ることの嬉しさを今、味わっています。二人の師と諸先生、書友に尊敬と感謝の思いを捧げたい。  
(翠心)

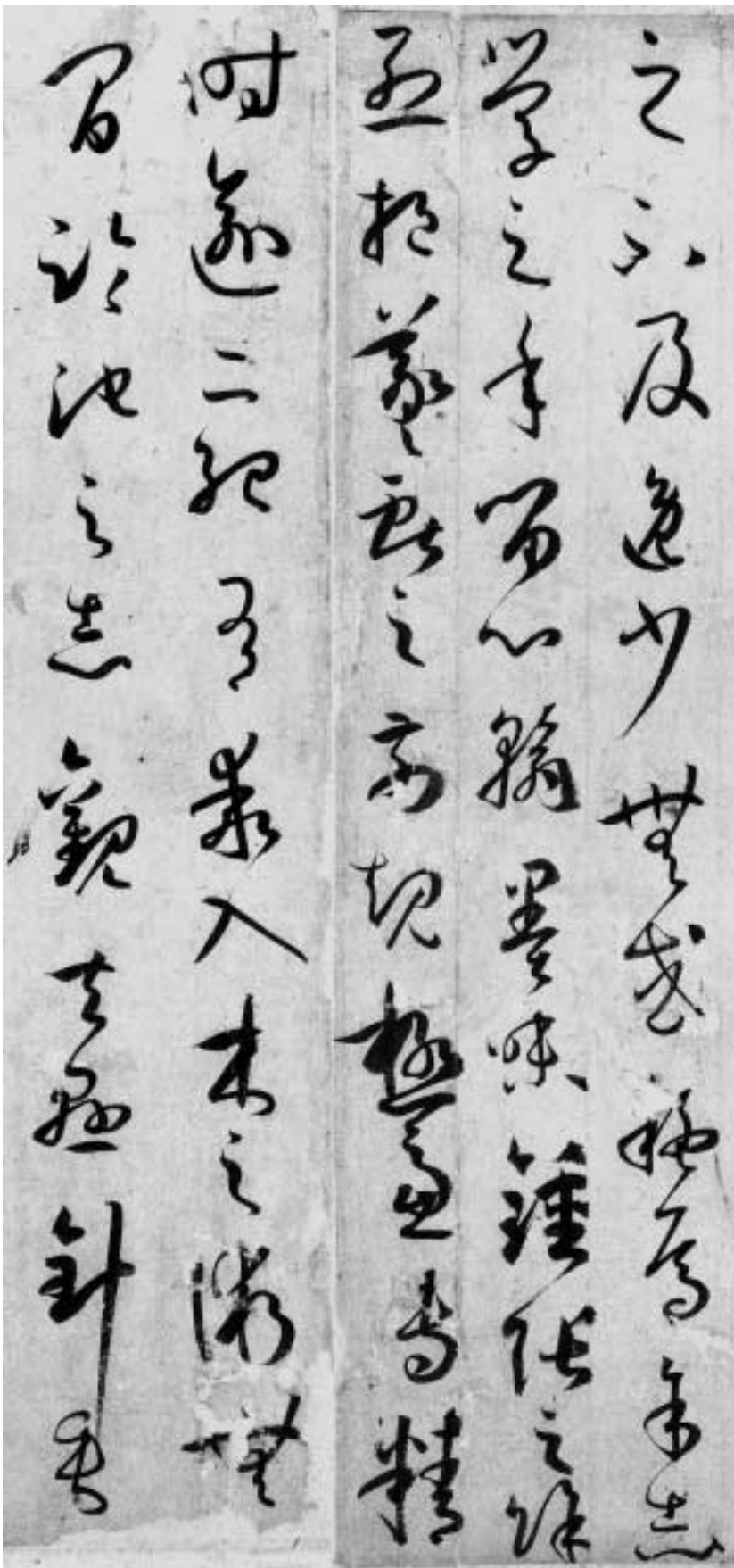


〔解説〕書譜は駢儷文べんれいぶんという美文体により、草書の手本としてふさわしいものです。これほど多くの草体を内包する作品は、極めて稀です。  
また、書譜は草稿文である為、文章をた

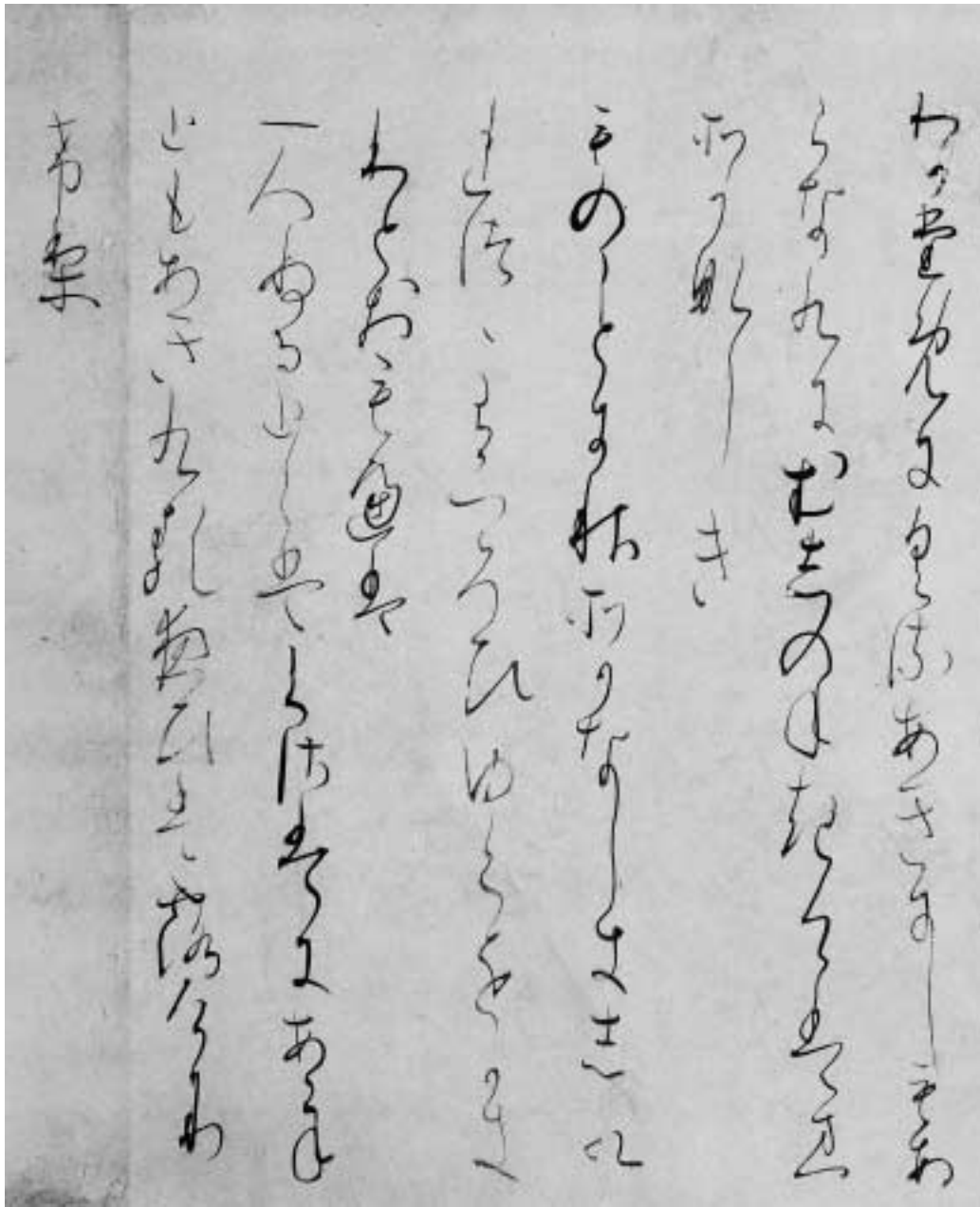
しかめながら書いています。どちらかと言  
うと書の表現に全神経を集中していません。  
しかし、過庭は、二王の書法を深く窮めた  
妙手ですから、無意識のうちに見事な書が  
書けています。  
(編集部)

用紙 半紙普通判  
注 漢字研究部競書作品は、  
左の法帖の中から  
何文字臨書してもよい。  
(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる  
署名、もしくは  
○○臨  
(押印のみ可)



之不及逸少。無或疑焉。余志／學之年。留心翰墨。味鍾張之餘／烈。挹羲獻之前規。極慮專精。／時逾二紀。有乖入木之術。無／問臨池之志。觀夫懸針垂



※右記の掲載歌一首以上を書く(全臨も可) 用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

※左記の掲載歌一首以上を書く(全臨も可) 用紙・半紙普通判(料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

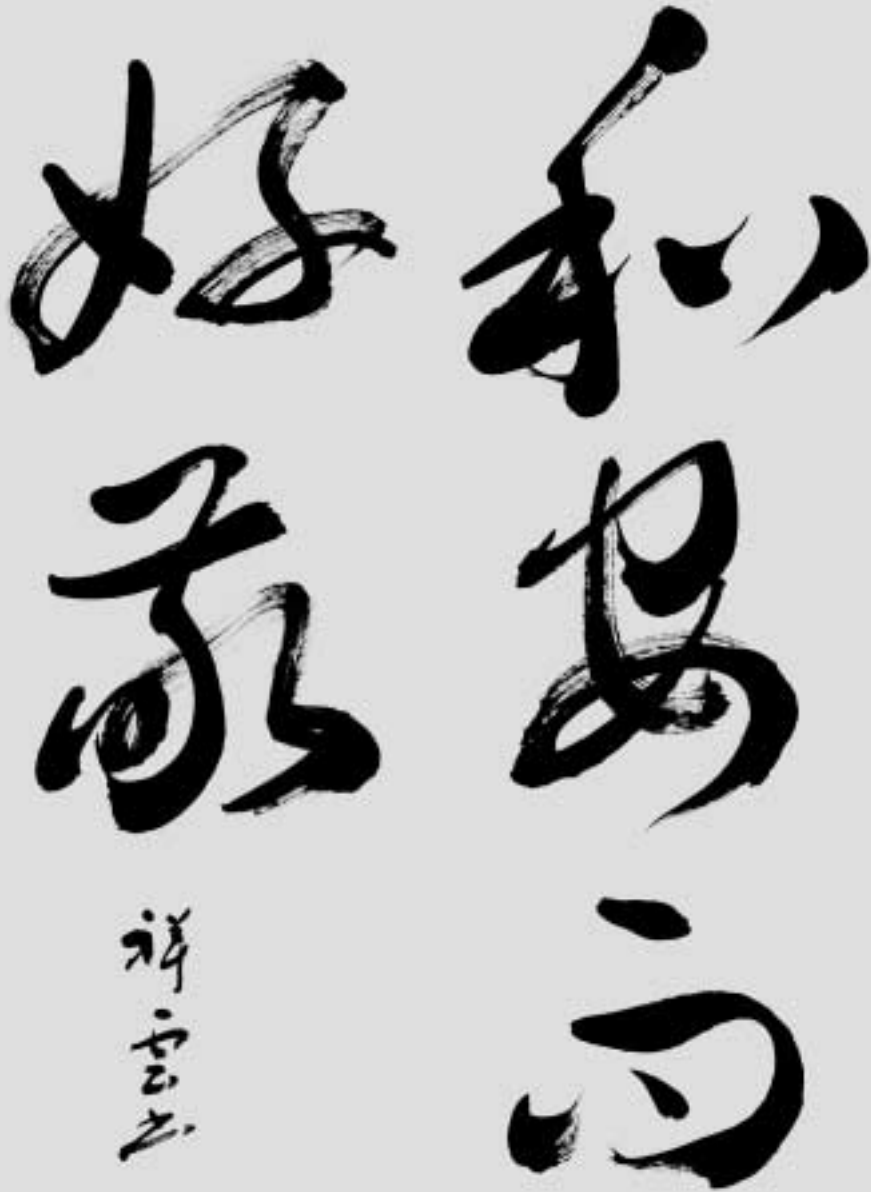
一人ぬるとこはくさばにあらね  
りとおもへば  
れつうつろひゆくをかぎ  
ものごとに秋ぞかなしきしぐ  
ぞかなしき  
わがためにくるあきにしもあ  
らなくにむしのねきけばまづ  
所可那  
毛筆  
りとおもへば  
一人ぬるとこはくさばにあらね  
りとおもへば  
れつうつろひゆくをかぎ  
ものごとに秋ぞかなしきしぐ  
ぞかなしき  
わがためにくるあきにしもあ  
らなくにむしのねきけばまづ

〈解説〉

関戸本が、圧倒的な人気を博しているのは、何といてもその流麗さの中に千変万化する躍動的な筆線とスタイルの優美なかなの容姿にあるといえよう。連線では、右回転のダイナミックな連綿線に特徴があり、連綿線の長短の変化や意連も多く用いられている。字形は、極端な奇異な文字はないが、かなりデフォルメされたものもあり、ただ文字の組み合わせが巧みな為全体としてはよく整っている。

漢字規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大野祥雲 選書



和安而好敬

よみ (和安にして敬を好む)

書体 自由

## 習い方解説 (五)

大野祥雲

和安而好敬  
(和安にして敬を好む)

「和」偏の動きを大きくし、対する旁は画数は少ないが、左右の均衡を保つように力強く。

「安」右上角の鋒先の変化と左下の筆の突き上げが対照的。筆の表裏を使って力強い線に。

「而」一画と二画目の間にゆとりをもち、さらに二画には、終画の二点を抱えこむスペースが必要。

「好」筆を立てた運筆で、偏と旁がほぼ均等になるように構成。中の余白で大きく見せる。

「敬」筆の開閉を生かしながら、上へ下へと息長く。最後は気持よく弾き出す。

漢字規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

種谷萬城選書

福 善  
縁 慶

萬城書

福縁善慶 よみ(福は善慶による)

書体Ⅱ楷書

## 習い方解説 (五)

種谷萬城

福縁善慶

(福は善慶による)

「禍因悪積、福縁善慶(禍は悪行を重ねることによって起り、福は善行や慶びから生じる。)」は千字文の中の言葉です。

今月は、初唐の三大家の一人・褚遂良(596~658)の書『雁塔聖教序』の書風で倣書しました。『雁塔聖教序』は、筆の弾力を生かし、抑揚のある筆法で書かれ、繊細で変化に富んだ線性が特徴です。

書の学習の基本は、古典を手本にして習うことです。これを臨書といえます。古典には技法の素晴らしさと、時代や地域、作者の個性による美意識が反映されています。臨書した古典の特徴をまねて、別の言葉を書くことを倣書といえます。臨書と倣書により鑑賞力と表現力を高めて下さい。

かな規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

下谷洋子選書

## 習い方解説 (五)

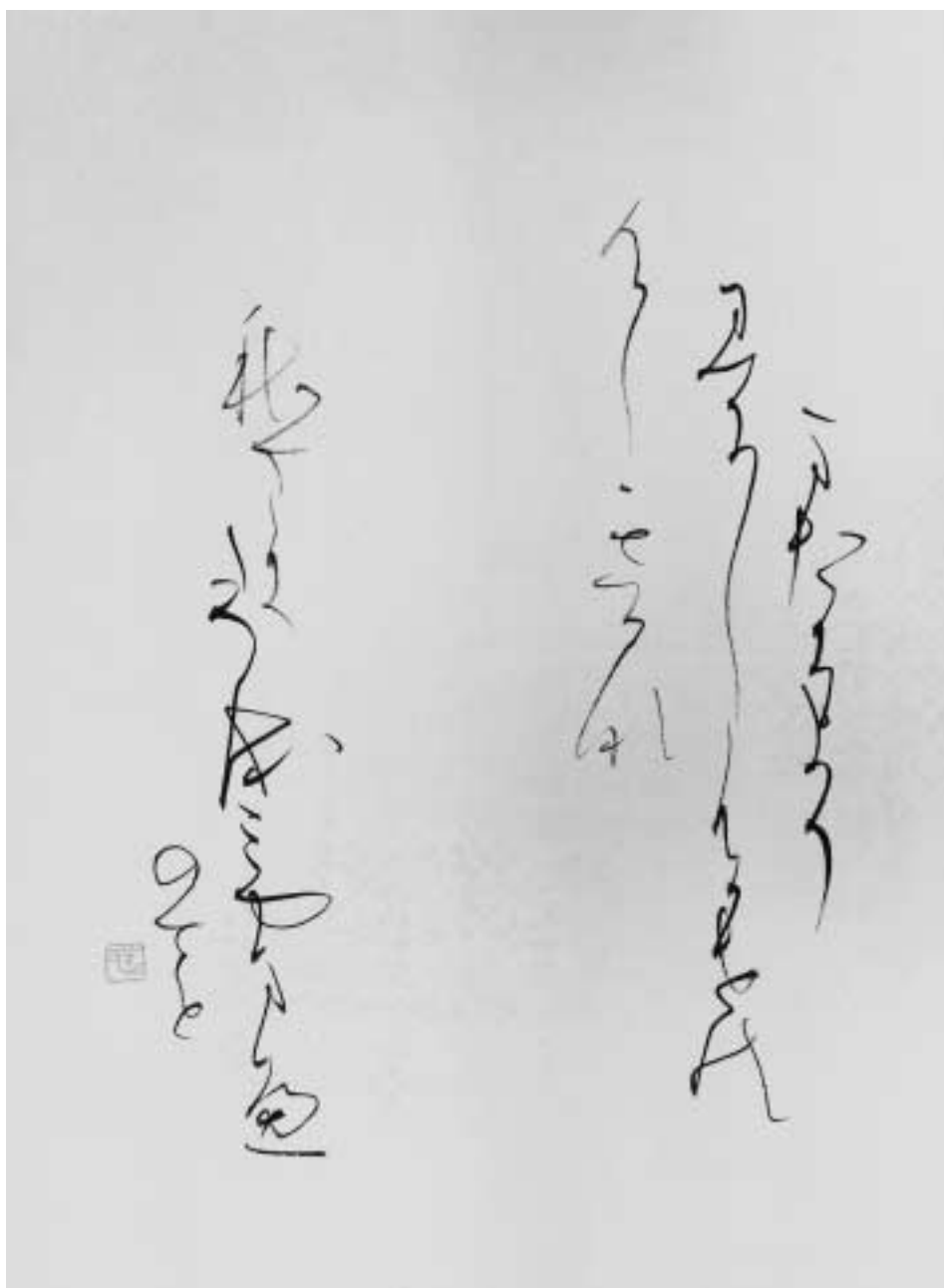
下谷洋子

まだきより身にしむ風のけしき  
かな 秋さきだつるみ山への里

(山家集)

小字かなの基本の線と線情について述べてきましたが、加えて筆や紙などによっても、線は大きく変わります。今回はコリンスキーのやや長鋒を用いました。イタチより柔らかく、気持ちよい弾力が出ます。筆先がよく利くイタチ毛や玉毛、いずれも鋭すぎない面相や柳葉筆がよいのですが、小筆は傷みやすいので、馴染んだ筆は何本か用意した方がよいでしょう。紙は、半紙や料紙の別がありますが、どちらも面が少々抵抗感のあるものが適します。筆先が引っ掛かり中鋒の線が出しやすく、運ぶ速度も安定します。

まだき||時も至らないのの意



よみ方

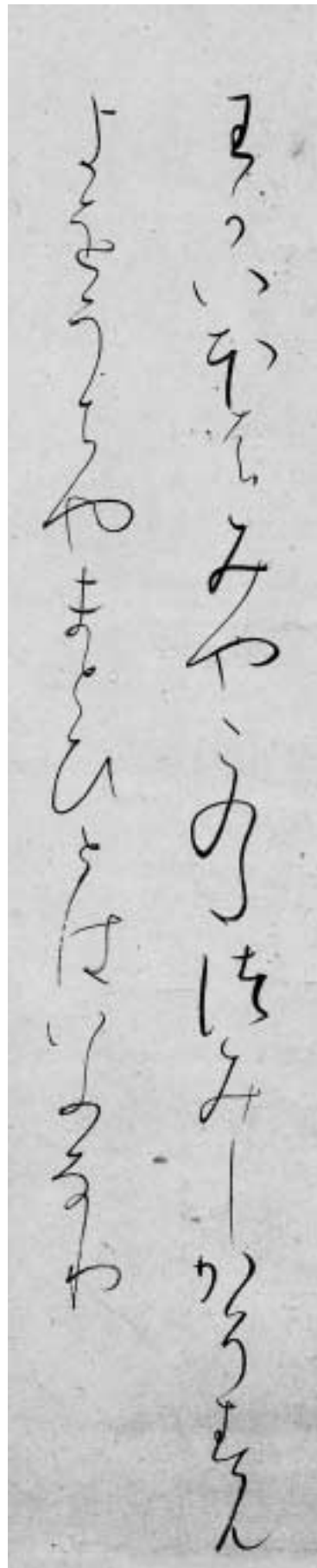
ま(万)だき(支)よりみ(見)に(爾)しむ(无)か(可)げ(世)の(能)け(介)しきか(可)な(那)  
秋さき(支)だ(多)つる(流)み(三)やま(万)へ(遍)のさと

創作

かな規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 わ(王)が(可)いほ(本)は(者)みやこのた(多)つ(徒)みしかぞ(曾)す(春)む(无)

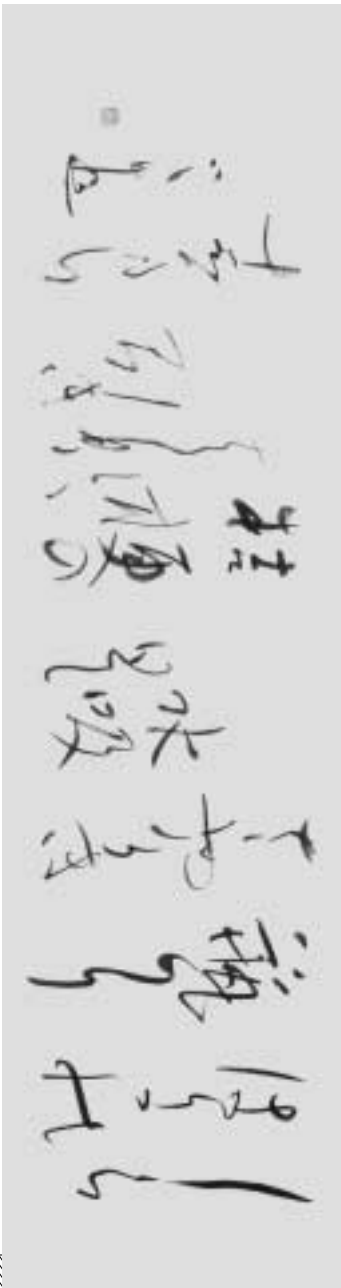
よをうぢやまとひとはいふな(奈)り(利)

習い方解説 (二)

かな条幅規定 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

田村澄子選書

田村澄子



よみ方

しらはに(尔)の(能)瓶に(耳)さやけ(介)き水吸ひ(日)て  
桔梗のは(者)な(那)は(八)引きし(志)ま(万)りみ(三)ゆ(遊)

創作



出品券

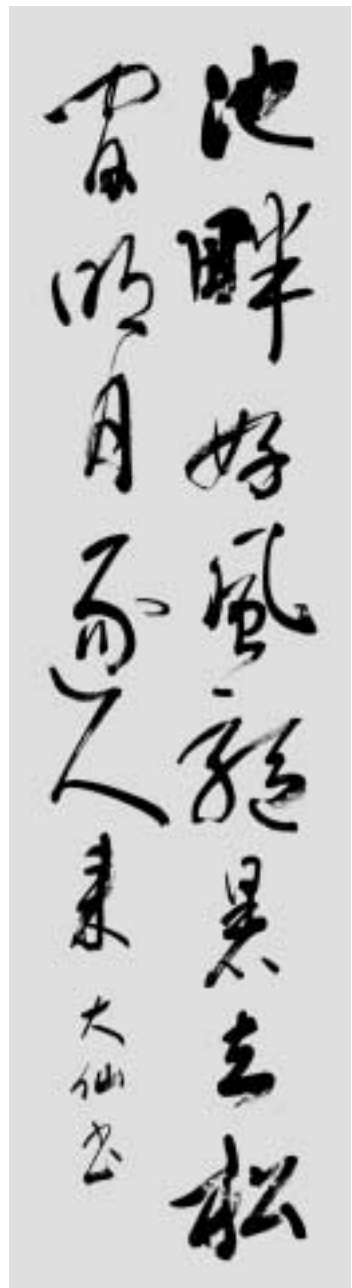
貼付位置

\*よこ形式に限る

しらはにの瓶にさやけき水吸ひ  
て桔梗の花は引き締めみゆ  
(長塚 節)  
白埴の瓶に活けた桔梗の花は、  
さわやかな水を吸いあげて引きし  
まってみえる。  
横作品は行が短いので流れが創  
りにくい。隣接行と同じ字が並ば  
ないよう、大小にも、また気脈が  
大切です。いろいろとデフォルメ  
してから白い紙に向い景色を創っ  
てみてください。

漢字条幅規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

村野大仙 選書

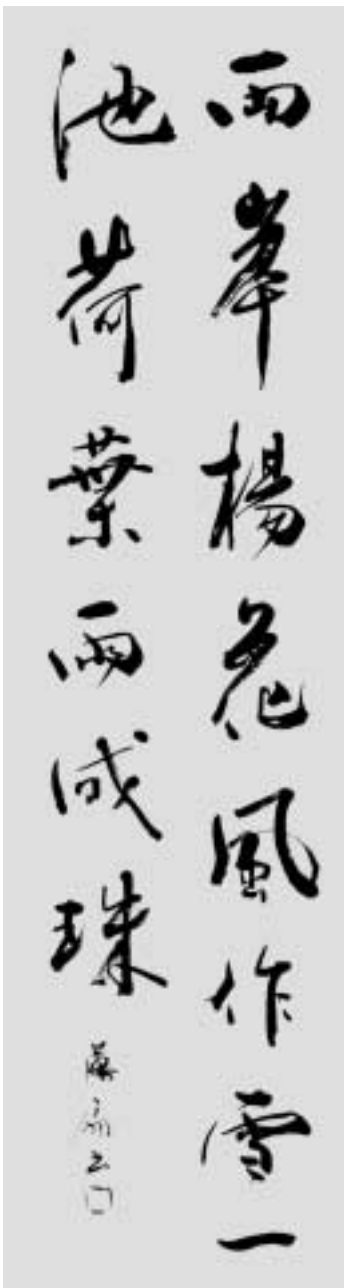


池畔好風驅暑去 松間明月逐人来  
(池畔の好風暑を驅って去り 松間の明月人を逐うて来る)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田藤扇 選書



兩岸楊花風作雪 一池荷葉雨成珠  
(兩岸の楊花風雪を作し 一池の荷葉雨珠を成す)

書体||自由

### 習い方解説 (五)

村野大仙

今回は単体を増やし連綿も取り入れてみました。更に線の太さや文字の大きさにも変化を与えて動きを求めてみました。運筆は速目になるが立ち止まるべき所はしっかりりとどめ、筆鋒を突き立てて起こし弾力を生かして進んで下さい。運筆にはリズムを用筆には抑揚をです。

### 習い方解説 (五)

半田藤扇

「兩岸の柳は花をとばして雪の如く、池一面の蓮の葉には雨がやどって珠をなす」

行書の単体だが、一貫した流れを出すことを考慮してください。リズム・線の太、細、筆脈を大切に息の長い作品を心がけてみてはいかがでしょう。この調子が自分のものであると連綿への発展が生じてきます。

習い方解説 (五)

西林乘宣

ありがたきもの舅にほめらる  
 る婿また姑に思はるゝ嫁の  
 君毛のよく抜くらしらが  
 ぬの毛ぬき主そしらぬ従  
 者（枕草子より）。

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

〈よみ〉ありがたきもの舅にほめらる

る婿また姑に思はるゝ嫁の

君毛のよく抜くるしろが

ぬの毛ぬき主そしらぬ従

者（枕草子より）

「枕草子」

清少納言が正暦4年、皇后定子に宮  
 仕に出てから約10年間の宮廷生活の中体  
 験した生活記録や自然人事の随感随想  
 を綴ったもの。300余段から成る（日本  
 文学選）。

高校時代、皆さん方等しく学習し、  
 その中のいくつかも頭に残っているこ  
 とと思う。私は庭木の手入れで高い所  
 に登るとき、「高名の木登り」なるく  
 だりがいつも頭をよぎり、一気に本書  
 成立年の100年前後まで遡るのだから不  
 思議である。

練習にあたって

新聞の折込み広告の中から、ウラの  
 白いのをとっておき、それをカッター  
 でハガキ大に切って活用するのも一法  
 なり。ほかに学校にお勤めで、賞状や  
 卒業証書等を書かれる方は、反古、残  
 部を同じく活用したい。舅（しゅうと）  
 姑（しゅうとめ）主（しゅう）従者  
 （しゆ）

※落款を入れ忘れないようにしてくだ  
 さい。（落款は自分の名前を入れて  
 ください。）



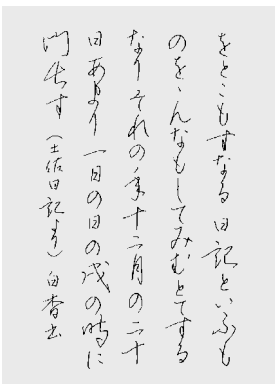
# ホープ作品 各部総評

NO. 578

ペン字部 師範 菊池 白雪

温雅な字形と繊細でやわらかな運筆で、空間の呼吸を暖かく表現した見事な作品。

◎ペン字部総評 全体的に流れのある作品が多かったが、連続していてもしなくてもつながっている呼吸を大切に。  
(孝子評)



漢字条幅部 師範 山田 悦香

小気味よい渴筆主体の筆致がリズムを醸し出し、軽妙な流れある作。落款やや目立ち、印あれば尚。

◎漢字条幅部総評 創作表現の鍛練の場として条幅部は漢字・かな共々大いに活用してほしい。自らの工夫研究を更に深めて。(天露評)



現代詩文書部 特選 喜多志津子

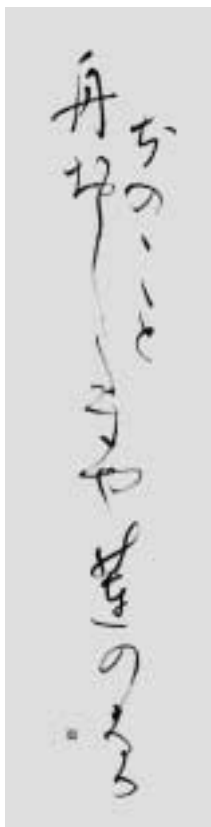
大きな空間をとらえて、ダイナミックに「水の屑」が表現されている。余白との調和もよい。

◎現代詩文書部総評 多様な表現は大変良い。書きこまれた牙えある線の表現に期待する。(堂光評)



かな条幅部 師範 天野あい子

句意を深く理解し、一切気負いのない自然な筆致での表現は、格調高い美事な天野ワールドです。



前衛書部 特選 茂木 真蘭

一つの線の中に濃濁がうまく混成し線質も躍動感にあふれ余白に響く作品である。

◎前衛書部総評 最近一段と作品の向上が見られて審査にも苦労しているが喜ばしいです。(如水評)



◎かな条幅部総評 全般に構成の研究は行き届いていたが、落款を忘れた人が目立った。作品の一部と考える習慣を！

(明子評)

漢字部 師範 山田 悦香

造形力巧みでよく空間をつかみ潤渾の構成も納得できる。のびやかで紙面を飛翔する快作。

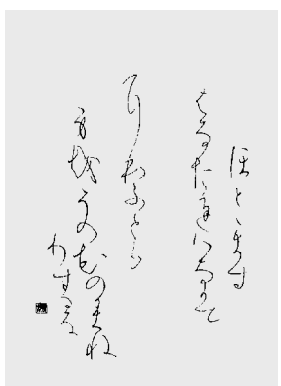
◎漢字部総評 書は線、線の中でも、強い線が構成の骨格となるので最も大切なことを絶えず心に止めておきたい。  
(春洋評)



かな部 師範 大村 静香

古筆の学習の成果か、用筆も運筆も適格で紙面への配置も美しく目を引きました。印が少々大きい。

◎かな部総評 古筆調のため、誤字がなく心地よい作品が多かったが、小さい・細い作品は貧相になるので拡大コピーの利用を。(洋子評)



特別研究部  
優秀作品(特選)



53×180cm

かな

(卯月) 須田清子

「源氏物語より」

◆かなり書を身全体の力を利用して大きな廻転の中に取り入れる技は線を生き生きと見せてくれる。欲をいうと少し休む所も欲しい感じ。(倫子評)

◆響きの高い線質の中字で長文を一貫した呼吸で書きつづける。かなの現代化には、この大きさまで。これ以上になると別の要素が加わる。(春洋評)

◆緊張感の持続で描いた美しい線は、計算されていない筈はないが、自然な景色を生み出しました。押さえめ、控えめの巧みは天晴れです。(明子評)

◆小気味よいリズム感溢れる作。確かな表現技術と計算されたような構成力がみごとで、完成度の高い作。最後の部分、落款を含めもう一工夫。(大雲評)

須田清子書

前衛書

(青蓮) 大町菜円

「友情」

◆起筆の縦画の強さを下部の小さい形で、がっちり受け止めた構成の確かさが、この作品の全てといってもよい。中央の広がりも又安定する。(春洋評)

◆表現へのあふれる思いを、控えめな墨量で、かすれの美しさで描いた筆力の確かさが魅力です。動くことと止まることのハーモニーが絶妙。(明子評)

◆潤濁の変化とバランスが調和。大胆な運筆から醸し出される拡がりや雄大さを生む。中央部の渴筆、やや上すべりの感あり。さらに研究を。(大雲評)

◆筆と一体となった躍動的な作品。紙に筆がおりると一気に構成されるのでは。どのかたまりを生かすのか頭の隅に考えを持ち構成されたら。(倫子評)



大町菜円書  
180×60cm

総評

三宅素峰先生の遺墨展が岡山で開かれた。一生の書業を目の当たりに見、その信念の強さに驚愕した。若い頃は前衛から漢字まで、すべてものに手をつけ探求心やまなないものがあつたが最終は近代詩文書の道を歩み一つの作風を確立した。その作風は素朴さと近代性を兼ね備え現在も近代詩文書の一つの金字塔と言っても過言ではないだろう。またご自宅に残された作品(臨書も含め)の膨大な量には驚かされ、やはりこの基礎があつてこそその作風だったと納得もし自分の不勉強を反省もさせられた。

今回は68点(漢14、か7、現26、前19、篆2)毎日展地方展と続き疲れ気味か、点数もだいぶ減である。日頃の積み重ねが大切である。ふるって出品を!

〈特選候補者〉

漢	蒼原 島貫	琴燐	現	翠苑 氏家	久光
か	卯月 前田まさ美	篆	大雲 佐藤	希雲	
現	翠柳 加藤 紫翠	前	蓮紅 一條	紅蕭	
樹原 庄司	咏艸				

漢字

(舎人)

高橋小汀

「黄鶴楼…」



高橋小汀書

135×70cm

◆力強く迫ってくるものは何？ 接する二行の組み合わせが楽しく感じられ、心ひかれました。軽さの方向にも同じ実験を期待します。(明子評)

◆朴訥な木簡を思わせる筆致が不思議な魅力を發揮している。粗さがもう少し落ち着くとさらに深味ある表現となるでしょう。(大雲評)

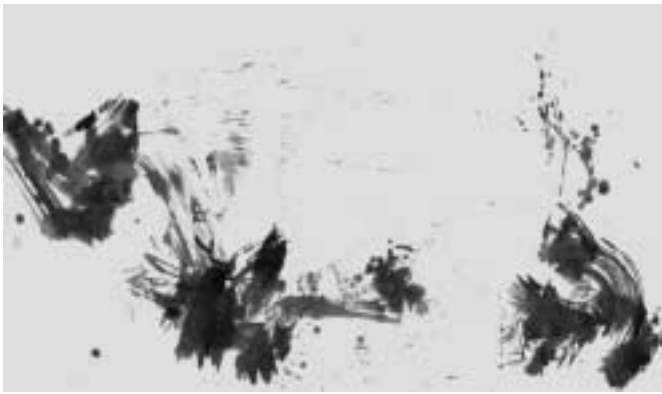
◆書から大きな声で読んで聞かせてくれるようなひびきを感じる。力強さがある反面、筆の荒さが目につくのは何の為なのか。筆の質によるかも。(倫子評)

◆素朴な線を組み立て、文字の大小を加えて一気にまとめたもの、潤濁の変化による面白さがねらいか、落款が真面目過ぎたかもしれない。(春洋評)

前衛書

(四谷)

星野成美



97×165cm

「涼」

◆気迫と躍動感に溢れた作。小手先の技巧ではない体当りの表現意欲を買う。墨色やや濁りがあり、さらに研究工夫されることを。(大雲評)

◆体全体を使って筆を動かして行くのに一寸場所を考えて見たら。勢いは感ずるがそれを一層表現するのに静の動きも大切なのかもしれない。(倫子評)

◆左端から書き始めたとすれば、右端下部はややリズムが異なるが、中央の飛沫がこれを繋ぐ。ちょっと軽いが「涼」のねらいは理解できる。(春洋評)

◆大作を見るには、見る側に覚悟が求められます。作品からの揺さぶりが他のものとは異質です。さらに奥深さが加わると恐ろしいかも知れない。(明子評)

星野成美書

現代詩文書

(炎華) 佐藤華炎

「北原白秋のうた」

70×135cm

◆詩を口ずさみたくなるような筆の動きが出ている。線を書く時の呼吸が動きと一緒にしているのが功を奏しているのかも。心うきうきします。(倫子評)

◆濃墨で線の大小、線の方向に工夫のあとが見え、明るくまとめたのはよい。筆が細く、細線が固くなったことが残念だ。墨色少し濃すぎたか。(春洋評)

◆濃墨での筆の扱いが美事です。自由に使いながら書きすぎない表現力が余白の輝きとなって明るく好ましい。落款印が面白く楽しい。(明子評)

◆上部に集約させ、下部の余白に悠遠とした広がりを感じさせる構成がみごと。濃墨を柔毫長鋒で冴えある線の妙味を出す。次が楽しみです。(大雲評)

佐藤華炎書

漢字研究部  
(久隔帖)

選評 村野大仙

今月のホープ作品



藤田 かつ子

用紙が特別に白く明るく見えます。文字を紙いっぱい大きく書きながら少しも窮屈さを感じない。清らかな筆線と自然で淀みのない筆脈が、美しいハーモニーを奏で、心地よく響いてくる。

◎漢字研究部総評

久隔帖はどうも馴染みの薄い課題だったようです。起筆・送筆・転折・終(收)筆等

漢字研究部 特選 藤田かつ子  
それぞれ表現に迷いが窺えます。筆はどのように扱えばどう反応してくれるのか、一般的な基本用筆を確り学ばずに表面上の形ばかりを習字しておられる方が多いように思われます。筆線の表情は筆の使い方や運筆の呼吸で自然に生まれるものであり、形の上で真似して作り出すものではありません。分かりにくい話ですが、学書の観点に留意して勉強されることをおすすめします。

著筆之文雅後代惟示  
其委曲必造初稿奉上  
座下謹附貞聡仙子奉状和南  
私品筆習者皆在筆法堂  
高雅範例示 謹  
五月廿四日

謹附貞  
聡仙子

著筆之文雅後代  
惟示其委曲必造  
初稿奉上座下謹附  
貞聡仙子奉状和南  
五月廿四日

委曲  
必造

難後  
代改

弘仁四年  
青竹吾

奉状  
和南

必造初  
稿奉上

著筆之文雅後代惟示  
其委曲必造初稿奉上  
座下謹附貞聡仙子奉状和南  
私品筆習者皆在筆法堂  
五月廿四日

初稿  
奉上

仙子奉  
状和南

著筆之  
文雅後

難後  
代改

著筆之文雅後代  
惟示其委曲必造  
初稿奉上

奉状  
和南

謹附  
貞聡

難後  
代改

謹附貞  
聡仙子

著筆之文雅後代  
惟示其委曲必造  
初稿奉上

委曲必  
造和稿

難後  
代改

奉状  
和南

難後  
代改

奉状  
和南

四雅雅岳笙完  
草邦芳峰子治

佐青祥紫青里  
紀山泉泉霞美

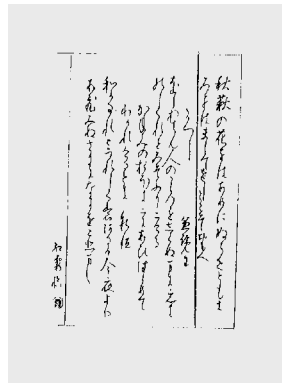
佳幸紅惠等清  
泉泉耀舟玉洗

佑天匡竹 美  
朋蘭子葉 健知子

かな研究部  
(筋切)

選評 黒川江偉子

今月のホープ作品



橋本紅霞

暢達した筋切の流れる線をよく捉え、漢字、かなの用筆もよく変化し、雰囲気のある見事な秀作としました。

◎かな研究部総評

筋切の三ヶ月の勉強の成果が、よく表れ、運筆も、自然に書けている作品が多く、ますます古筆の勉強に精進される事を願います。

- 龍優笑 愛悟嵐 信美星 昌照幸
- 宝子華 石子泉 子枝祥 子芳子

かな研究部成績表

秀石正A椿八京 明習華I翠街橋	秀作(60書)	遊書椿華蓮高翠N電長千英竜龍千石秀卯正秀こA書卯玉 雲青翠祥祥嶺柳H泉月葉峰鼎鼎鼎習水月華だI泉月松	特選
岩犬伊藤東熱 崎銅藤美代紅 子道英寿子紅	西小林山遊青近坂後杉神佐泉川村松寺新門墨大石藤岡津橋 澤崎崎池木遊谷藤浦谷藤水崎田丸野美野大石藤岡津橋	大雲 佳 朝倉 爽陽	石習 内田 皓星
秀石正A椿八京 明習華I翠街橋	秀作(60書)	大雲 佳 朝倉 爽陽	石習 内田 皓星
秀石正A椿八京 明習華I翠街橋	秀作(60書)	大雲 佳 朝倉 爽陽	石習 内田 皓星

〔特別昇級試験臨書課題〕

高 貞 碑 (楷書)

漢字部

第一種

半紙に写真掲載の中から5字を臨書・それ以外は不可



於邦黨若夫秉心塞淵。砥礪名教。伏

蘇孝慈墓誌銘 (楷書)

漢字部

第三種

半紙に写真掲載の中から24字〜30字を臨書・それ以外は不可



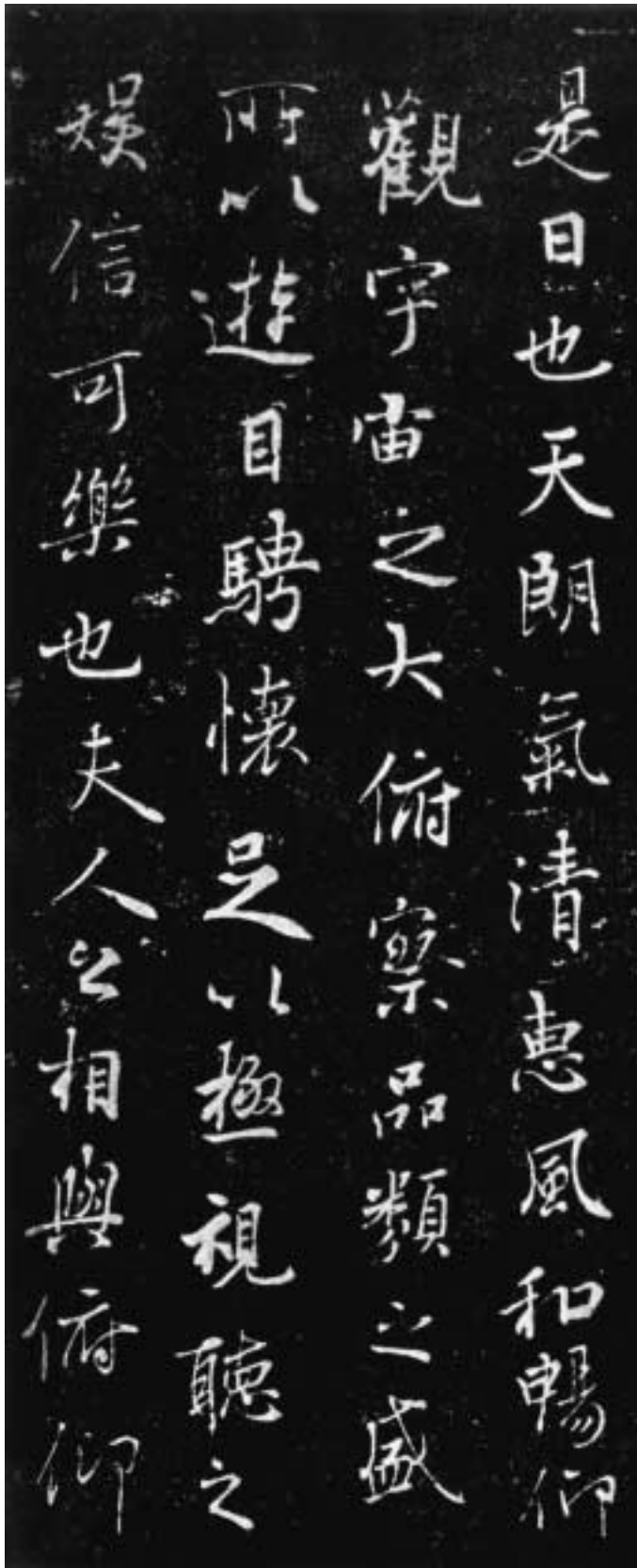
五色。一日千里。堤封絕際。波瀾莫浹。天經至極。人倫終始。優學登朝。飛英擅美。鉤陳弈

張金界奴本蘭亭叙 (行書)

漢字部

第二種

半紙に写真掲載の中から12字を臨書・それ以外は不可



是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰／觀宇宙之大。俯察品類之盛。／所以遊目騁懷。足以極視聽之／娛。信可樂也。夫人之相與俯仰。



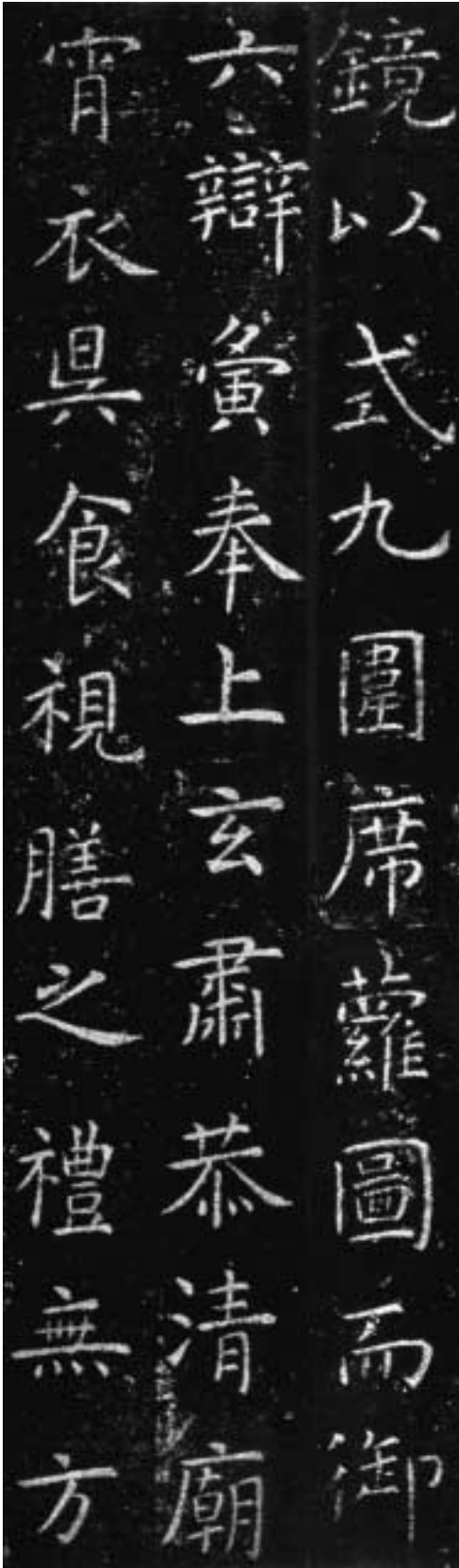
足下今年政七十耶。知體氣常佳。此大慶也。想復勲加。

孔子廟堂碑(楷書)

漢字条幅部

第二種

半切に写真掲載の中から14字を臨書・それ以外は不可



鏡以式九圍。席蘿圖。而御六辯。夤奉。上玄。肅恭清廟。宵衣旻食。視膳之禮無方。

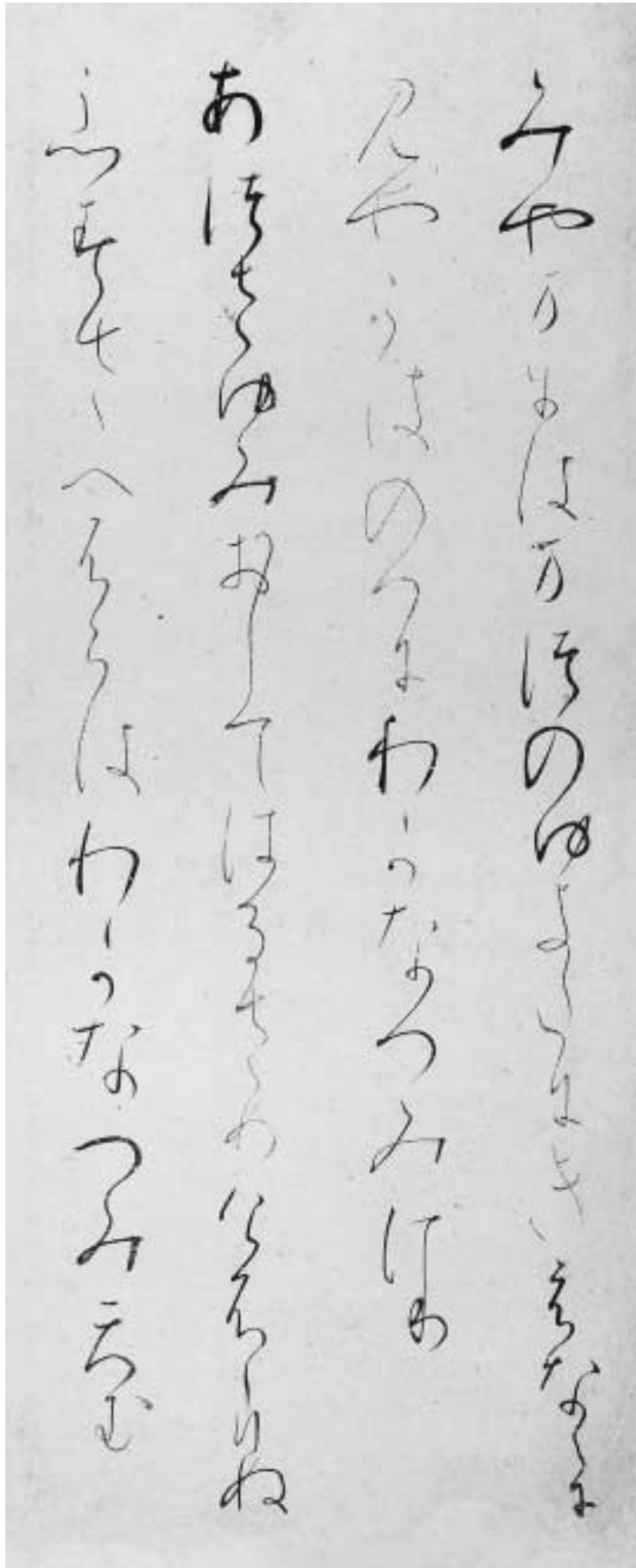


高野切第一種

かな部

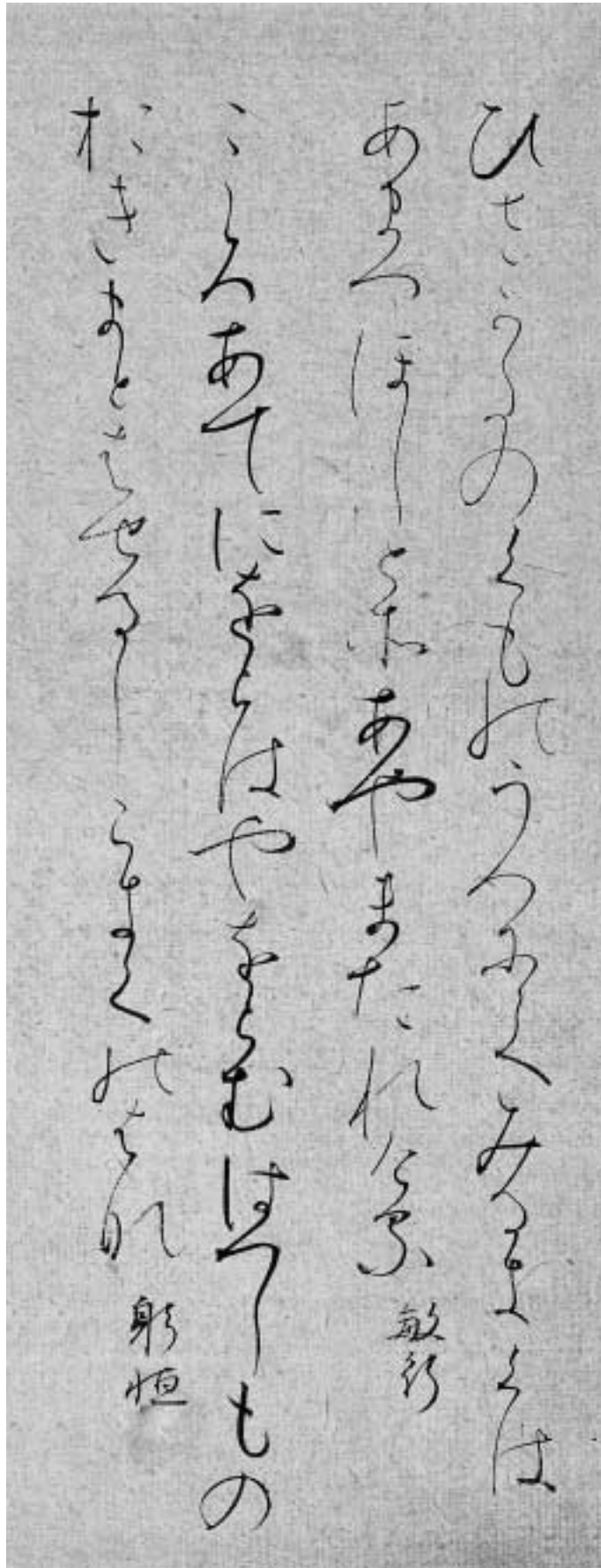
第一種

半紙に写真掲載の和歌・二首を書く・それ以外は不可（料紙可）



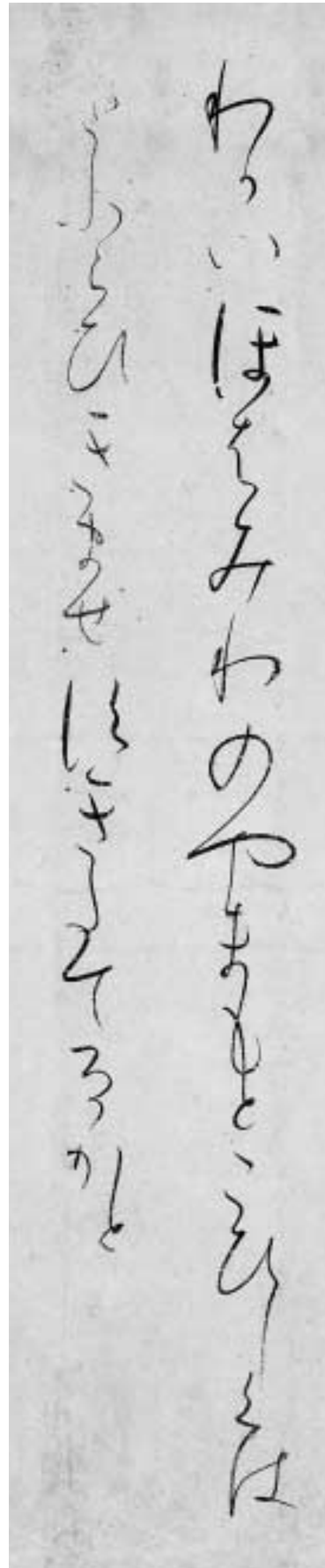
み<sup>万</sup>や<sup>尔</sup>ま<sup>万</sup>には<sup>能</sup>まつ<sup>支</sup>ゆ<sup>多</sup>き<sup>尔</sup>だ<sup>に</sup>き<sup>え</sup>なく<sup>久</sup>  
 あ<sup>介</sup>づ<sup>不</sup>さ<sup>介</sup>ゆ<sup>不</sup>み<sup>介</sup>お<sup>介</sup>して<sup>介</sup>は<sup>介</sup>る<sup>介</sup>さ<sup>介</sup>め<sup>介</sup>け<sup>介</sup>ふ<sup>介</sup>り<sup>介</sup>ぬ<sup>介</sup>

み<sup>見</sup>や<sup>見</sup>こ<sup>見</sup>は<sup>見</sup>の<sup>見</sup>べ<sup>不</sup>に<sup>不</sup>わ<sup>不</sup>か<sup>不</sup>な<sup>不</sup>つ<sup>不</sup>み<sup>不</sup>け<sup>不</sup>り<sup>不</sup>  
 あ<sup>悪</sup>す<sup>善</sup>さ<sup>善</sup>へ<sup>善</sup>ふ<sup>善</sup>ら<sup>善</sup>ば<sup>善</sup>わ<sup>善</sup>か<sup>善</sup>な<sup>善</sup>つ<sup>善</sup>み<sup>善</sup>む<sup>善</sup>



ひさ<sup>可</sup>かた<sup>多</sup>のく<sup>久</sup>もの<sup>能</sup>う<sup>尔</sup>へ<sup>互</sup>にて<sup>支</sup>みる<sup>久</sup>き<sup>久</sup>く<sup>は</sup> あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>ほ<sup>ほ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup> 敏<sup>介</sup>行<sup>果</sup>

こ<sup>こ</sup>ゝ<sup>ろ</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>に<sup>に</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>し<sup>し</sup>もの<sup>の</sup> お<sup>お</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>船<sup>船</sup>恒<sup>恒</sup>



わが<sup>可</sup>いはほ<sup>者</sup>はみわのやまもとこひしくは  
とぶらひきませ<sup>須</sup>すぎ<sup>多</sup>たてるかど

ご注意!!

名前のかき方  
どの部も氏名または名、号を書く。  
臨書は○○臨と書く。  
印だけでは失格、特にかな・ペン  
字は注意のこと。

表紙写真「書譜」

お知らせ

8月12日(水)

～

16日(日)

事務所は、夏季休業させていただきます。  
よろしくお願いたします。

(財)書道芸術院

出品券 9月15日締切

※9月号の課題予告は  
47ページに記載。